43　当院における急性虫垂炎の検討

（霞ケ浦・外科）伊藤　浩、植竹正彦、鮫島　博之、薗田　善之、小松崎　薫、渡辺　善徳、後藤　悦久、生方　英幸、松本文和、上甲　宏、平良　朝秀、舟山　仁行、西田　清一、湯本　二郎、佐藤　茂範、中田一郎、田渕　崇文、湯本　克彦、相馬　哲夫

急性虫垂炎は一般外科疾患の中でも最も頻度の高い疾患である。抗生物質などの進歩により死亡例はまれであるが、漫然とした経過観察は穿孔を招く恐れもあり、夜間救急時などの手術決定にあたっては、鑑別疾患が多岐にわたることも相まって、的確な診断が要求される。

1985年から1989年までの5年間の当科における急性虫垂炎手術例の550例について検討したので報告する。カタル性226例(41.1%)、蜂窩織炎150例(27.3%)、壊疽性149例(27.1%)、この内、穿孔例は54例であった、死亡例はなかった。術中、術後に虫垂炎以外の疾患と判明した症例で25例(4.5%)にみられた。

年齢及び性別で見ると、19才以下が52%と過半数をしめ、男女比はほぼ1:1であった。季節的に見ると、夏に多く冬に少ない傾向にあったが、年間を通じての変動は有意なものではなかった。

急性虫垂炎と鑑別困難な症例は10才から39才の女性が過半数を占めた。婦人科領域疾患が40%を占めた。

白血球数10000以上、好中球比率75%以上、及びBlumberg徴候の有所見率は炎症の程度を反映した。

Blumberg徴候は、カタル性でも21.2%にみられたが、蜂窩織炎で74.5%、壊疽性で85.7%、穿孔性では92.6%と高率にみられたが、それは腹膜刺激症状を100%反映するとは限らず、手術に際しては各所見を参考にした総合的診断が必要であると考えられた。

44　Angiolymphoid hyperplasia with eosinophilia の1例

（皮膚科学）
○平田雅子、木村達郎、宮野径彰、徳田安章

41歳、男。6カ月前より右耳前部に自覚症状のない皮疹が出現し徐々に拡大し拇指頭大となる。2カ月後同様の皮疹が右後頭部にも出現し鶏卵大となる。末梢血好酸球5%。IgE 3200IU／mℓ。組織では真皮深層から皮下脂肪織に稠密な細胞浸潤巣がみられ、主としてリンパ球と好酸球、一部形質細胞よりなる。内皮細胞の浮腫をともなう毛細血管の増生が著明で、多数の沪胞様構造の形成もみられる。木村氏病との異同についても論じた。